

| |
|---------------|
| トピックス |
| 1. 表彰ということ |
| 2. 文月～鬼灯の思い出～ |



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 社会保険労務士・行政書士
 福留章

龍馬通信

No. 19

2019年7月号

文月ほおずき ～鬼灯の思い出～

七月の和名は「文月（ふみづき）」。異称としてはいずれも七夕にちなんで七夕月、七夜月、愛逢月。七月七日の夜、織姫と彦星が鵲の橋を渡って一夜の逢瀬を楽しむといのはいかにもロマンチックな話ではあります。高齢者の私などまるでピントのぼけた昔の話ですが、そんな私にも淡い恋に憧れた時代もありました。昭和レトロの時代です。

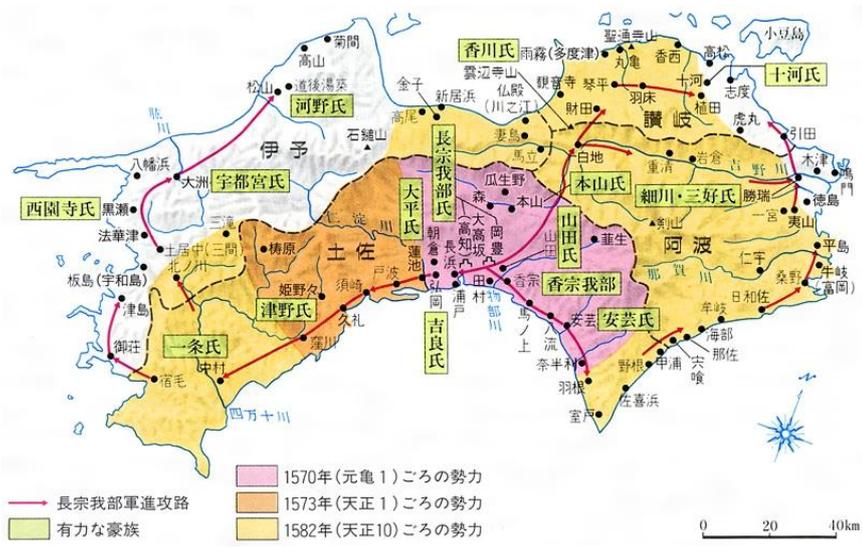
高知市内で住んでいた地域に「潮江天満宮」というお宮があって縁日ともなれば近郷近在の老若男女が列をなしてお参りをする習慣でした。中学生ぐらいの多感な時期、そんな縁日の日こそ割合おっぴらに異性に声を掛ける機会でもありました。夏ともなれば浴衣の君と二人連れ。1km程の参道を歩くだけでも有頂天。走馬燈、水中花、金魚すくい、アセチレングスの白い…そんな夜店の中ではおずきを買ってあげました。固い実をほぐして中の種を出した後、それを口に含んで鳴らすというただそれだけの遊びだったけれど、何とも懐かしく胸がしめつけられます。ベンチで一生懸命実をほぐす彼女の仕草が愛らしく、失敗して皮が破れてしまった時のふくれっ面も可愛かった…。



入梅が遅れているけれど愈々夏も本番。熱中症にはくれぐれも気をつけて元気に夏を過ごしましょう。

随筆 『龍馬と私』～土佐という国～

坂本龍馬が生まれ育った国「土佐」、「土州」とも呼ばれる。県土は現在の高知県とほぼ一致していて、国境が変化することはほとんどなかった。古くから「中国」「遠国」に格付けされた遠流の地であった。歴代の国守の中でも最も有名なのが紀貫之で延長8年（930年）から承平4年（934年）まで国守を務め、翌承平5年（935年）の2ヵ月後京都に帰りついでいる。その2ヵ月間の道中を紀行文「土佐日記」にまとめた。



とにかく土佐は避地とみなされ阿波・讃岐・伊予が「上国」であったのに対し「中国」であった。奈良時代には多くの貴人、賢人が流される流刑地であった。土佐国は多くの支配者が入れ替わり立ち替わりした。戦国時代初期までは細川氏の分国であったが、その後群雄割拠となり長曾我部氏が本山・吉良・大平・津野・安芸・香宗我部の6氏を倒し、さらに土佐中村の一条氏を倒して土佐国を統一する。鎌倉時代承久の乱（1221年）以降の事である。長宗

我部元親は天正13年（1585年）に四国全土を統一したが、豊臣秀吉の四国征伐に敗れ、降伏し、土佐一国を安堵される。長宗我部氏は盛親の代に関ヶ原の合戦に際し、うかつにも西軍についたため破れ、滅亡する。天下の情勢を見る目を持たず、情報不足の中でその進路を見誤ってしまった。天下が徳川家に移ると遠江国掛川城主だった山内一豊が土佐27万石の国守として入封する。（以下次号）

表彰ということ

以前、ある雑誌に恵まれない境遇にいる人を紹介する連載記事を書いた時の事である。毎月、福祉施設に5000円のお金を35年間も送り続けているという女性に会いに行った。八畳一間の木造アパートに住み新聞配達をしている70歳の女性は、僕の取材をかたくなに拒むのをやっとお願いした。

彼女は2歳の時に母親が病死、施設に預けられる。他の子にいじめられ、かばってくれる職員の優しさが身にしみたという。中学を出て働いていた紡績工場で20歳のとき工場の男と結婚、7年間に3人の女の子が生まれるが、彼女が30歳のとき夫は結核で死亡、彼女は夫の少額の退職金で、道ばたでリヤカーを店にしてネクタイを売る。上の子は小学生、あとの二人をリヤカー横で遊ばせる。

ネクタイは一日に1本くらいしか売れなかった。あるとき中年の女性がきて「これ、鯛焼き、子どもさんに。」と差し出され涙がほとばしった。冬の雪の日、二人の子どもが空腹と寒さで泣きわめいているとき初老の紳士がきてネクタイを2本買ってくれる。彼の身なりから、とても彼女が売るネクタイを身につける人とは思えなかったという。彼は一言も喋らず釣り銭もとらずに去って行った。

間もなく彼女は疲労で倒れ、市役所へ行き医療費の助成を頼んだが規則でカネは出せないと言われた。しかしその職員は自分用の牛乳を一本持たせてくれて「力不足でごめん。」と謝ったそうだ。

彼女は露店をやめて新聞配達を始める。高校へ入った上の子が夜は食堂の茶碗洗いのアルバイトをして二人の妹の世話をした。ある日、新聞で親のいない子の施設が経営難と知り、彼女は即座に5000円を送った。名前は伏せた。家族4人の生活は苦しかったが、自分を助けてくれた人々を思うと苦しいなんて言われてられなかったという。

35年間の毎月の送金が知れ、市が表彰したいと言ってきたとき彼女はきっぱり辞退した。「私は昔、ある人から鯛焼きをいただいたとき決心したんです。一つの手は自分と家族のために、もう一つの手は人様のために使おうと。私のしたことなんか、たいしたことはない。表彰するなら私に牛乳をくれた人やネクタイを買ってくれた人を表彰してください。」彼女の言葉に僕は絶句して天を仰いだ。



（作家・小檜山 博 理念と経営「くちびるに歌を持って 心に太陽を持って」30年2月号より）

熱中症を予防しよう！

～あなたを守る5つのポイント！～



- ①こまめな水分補給
- ②涼しい服装と日傘・帽子の使用
- ③扇風機・エアコンの上手な利用
- ④バランスの良い食事と十分な睡眠
- ⑤冷たいタオルや保冷剤の活用



《 お互いに声を掛けあうことも大切です！！ 》